

令和5年度 自己評価表(最終評価)

鳥取県立倉吉東高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	1 主体的学習者の育成 2 21世紀をリードする人材の育成	今年度の重点目標	1 学校の魅力化・特色化の推進・発信と中高連携の強化 2 定時制教育のさらなる充実 3 生徒支援の充実と業務改善の取組
-------------------	----------------------------------	----------	---

○評価基準 A 80%以上(概ね達成) B 60～80%(一定の成果がある) C 40～60%(さらなる努力が必要) D 40%以下(現状が改善されていない)

【全日制課程】

年度当初					最終評価結果(3)月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
学校の魅力化・特色化の推進	国際バカロレア(IB)教育開始への対応	・昨年度9月23日にIBワールドスクールとして認定され、今年度の入学生が一期生となる。文部科学省の学習指導要領の内容を踏まえながら来年度のIB授業の開始に向けてその接続を円滑に行うための授業全般の改良が必要とされる。 ・他分掌との連携を前提とした多様な業務を協働的な活動と捉えて学校全体の教育活動の活性化を通してIBワールドスクールとしての基盤を構築することが急務である。	・IB教育の実践を通して、本校の重点目標である「アナログとデジタルをバランスよく活用して知識や技術を身につけ、それらを日常生活や他教科と横断的に結びつけながら探究的に学ぶことにより、グローバルリーダーとして活躍できる人材の育成を図る。」の実現に貢献する。 ・探究型の学習における基礎的なスキルとしての図書館活用が生徒、教職員へ定着することに努め、幅広く多くの書籍や情報源に触れる機会を提供する。	・IB教科担当者の会(M&I Meeting)を週1回行い、IBディプロマプログラムに対応した授業の実践と振り返りを行う。 ・IB推進委員会を月1回開催し、学校全体としてIBに取り組みながら、協働的な業務形態の促進を図る。 ・育友会及び県内中学校との連携を強化し、IB教育を知る機会の設定と情報の共有に努める。 ・先進校視察、各種研修会の情報共有、校内研修会の実施を通して「学び方を学ぶ」「教え方を学ぶ」機会の提供をする。 ・「学びの中心」としての図書館の位置付け(ポリシー作成)と各種データに関する調査研究を行う。	・M&Iは、授業に関する話し合いの場所として少しずつ軌道修正を行いながら実施している。IB推進委員会は予定通り実施しており、IBに関する行事についても分掌横断をしながら行えているが、部内の人員に対して担当する企画が多く、学校の広報としてのIBの活動は負担が大きい。 ・県のPTA大会などでもIBに関する説明をする機会があり、また、概ね県内の小学校中学校にポスターやチラシを配布することができた。 ・先進校視察や校内研修は実施できたが、その情報を提供したり振り返りをする機会を設定することができない。 ・図書館のポリシーを作成したり、図書館利用の新たな指針として入館者数をカウントすることにし、現在実践している。	B	・来年度もM&Iの時間は設定し、予算執行についての話し合いは推進委員会で行うこととする。推進委員会で、分掌を横断する業務について担当をどうするか来年度の方針を話し合う。 ・育友会との連携は今後も必須となる。また、IB推進委員会の再編成についても検討すべきである。先進校視察の報告や研修の振り返りについては余裕ある運営設計が必要であり、そのためには行事などの削減も検討する必要がある。 ・探究型の学習のための図書館として、授業実践等も活用して、その役割や活動を継続して検証する。
	ICTを活用した指導と適切な評価	・生徒の批判的、概念的思考の育成のために、IBプログラムのTOK、CAS、EEを取り入れた教科横断的な授業を試行することと併せて、それらの実践例を全体で共有する機会が必要である。 ・教育課程実施において、「指導と評価の一体化」の研究を継続していく必要がある。 ・授業評価アンケートは、生徒の主体性を育成する授業を目的として実施している。	・学習指導要領と国際バカロレア(IB)教育の理念をもとに教育課程を改善し、教育内容を充実させる。 ・IB教育実施に向けての授業実践と研究を進め、教科横断的な学びと学力(思考力・判断力・表現力)の強化及び向上を図る。 ・本校の「観点別評価」「指導と評価の一体化」の方法を確立し、生徒の学力を伸ばす。	・校内研究授業をIBワークショップや情報端末研修と連携させて実施し、授業改善に努める。 ・IBプログラムの試行授業を実施し、校内、地域に公開して意見を聞きながら改善していく。 ・生徒に全科目のシラバス(評価規準あり)を示し、定期考査やICTを活用したレポート等を通じた評価を行う。授業アンケートを活用することで指導方法の改善につなげる	・共同運営部主導で1年生の総合的な探究の時間にTOK、CAS、EEを導入した。TOK展示発表会を2月21日に実施する。 ・11月に授業を再編成し、現1年IB生の取り出し授業を実施している。公開等による教科横断的授業の共有ができた。 ・IBの修得単位の代替法とIB系を導入した教育課程が完成した。学習班は1年次にIB系1クラスと学術1クラスの2クラスを維持し編成した。 ・生徒に全科目のシラバス(評価規準あり)を配信したが、生徒の主体的な取り組みに課題が残った。(授業アンケート「自分で計画的に学びを進めている」前期52.2%→後期54.3%、「自ら発展的な内容の学習を進めることができている」前期54.4%→後期58.0%)	B	・教育実習期間、倉東学びウィーク以外に校内授業参観の機会を増やし、関係分掌と連携して研究授業や職員研修を継続して授業の向上を図る。 ・前期から習熟度別授業とIB系生徒の取り出し授業を前提とした学習班を基に時間割を編成する。 ・後期の授業アンケートの集計を早く、「主体的学習に取り組む態度」の評価法の研究を継続し、スタディサブリの活用を含めた、自ら計画的に学びを進める生徒を育成する。
	キャリア教育の充実と適切な進路目標の設定と実現	・キャリアについて深く考え、それを明確にして将来の選択肢や可能性を広げる活動を行っているが、限られた既知の知識や狭い認識の中だけで将来像が限定されてしまっている場合がある。 ・主体的な学習者の育成については十分にできているとは言えず、受動的な学習になってしまい、出願時に進路目標を下げざるを得ない生徒が少なからずいる。 ・日常的な生徒面談や各学年の進路検討会を通して、生徒の視野を広げ適切な進路志望ができるよう教職員間で情報共有等に努めている。	・様々な選択肢があることを知り、自分のキャリアに適した将来像を決定することができる。 ・3年間を見通した計画的かつ効果的な学習活動を主体的に行い、自己の進路実現に向けた学力を身につけている。 ・大学合格者数が学校目標(東京大学合格者を含む超難関大学合格者5名以上、難関大学合格者20名以上、中堅大学合格者50名以上)に到達している。	・各大学の特色や学校推薦型、総合型等の入試制度について研究し、生徒に還元する。 ・講演会や進路学習等を通して、キャリア形成の意義を考えるとともに、学年や分掌と連携し、日常的な面談や探究学習などを通して進路学習の時間だけに留まらない活動を行う。 ・面談や進路検討会等を通して適切な進路目標を設定するとともに、進路指導テストや校外模試等を利用して到達度を計り、進路実現に向けて授業や家庭学習の更なる充実を図る。	・大学から講師を招き、学校推薦型、総合型の入試制度や留意点等について8月、12月に講演会・研修を行った。 ・東大会、医学会等で本校卒業生による講演会を計4回開催し、自らのキャリアを深く考える機会とした。また、進路学習では学年団との連携をとりながら3年間に亘って継続した進路学習、進路指導を計画し実践している。 ・各学年の進路検討会等を通して、個々に合わせた適切な進路指導ができるよう、教職員間で情報を共有し指導力の向上に努めた。 ・主体的学習者の育成が十分とは言えず、特に(超)難関大を目指す数や学力層の育成が十分ではない。	B	・今後も特色入試等様々な入試に関する情報収集に努め、学年や教科に周知するとともに、生徒へ還元する。 ・学年団と密に連携を取り計画的に進路学習や進路指導を実践する。また、振り返りや課題等を集約し、内容や時間数なども含めて本校や生徒の現状に合ったものに改善していく。 ・生徒の現状を分析し、各学年や教科で具体的な方策を練り、実践する。また、今後も東大会や医学会等で講演会等を開催し、生徒の進路意識や学習意欲の向上を図る。
	探究学習の深化と指導体制の改善	・総合的な探究の時間において、生徒たちは自ら選んだテーマごとに担当教員のもと探究活動を行い、その成果を発表する形式で4年間実施してきた。この期間で、高校生国際シンポジウムなどの大会に参加し、好成績を残してきた。 ・課題として、探究活動と各教科の学習の結びつきが希薄であったり、探究テーマと進路目標のつながりを持ってない生徒が少なからずいること、探究活動の調査がネットだけに依存し、参考文献や先行探究調査が十分でないことが挙げられる。	・1年次生は主体的学習者として一歩踏み出している。 ・2年次生は主体的に学習に取り組み、進取の精神を養っている。(主体的学習者とは、生涯学習者として、学び続ける人物を意味し、進取の精神とは、新しい技術を取り入れながら学びへの自由を相互承認する精神を意味する。) ・3年次生は教科やこれまでに実践した探究的な学びを生かし、自らのキャリアの実現に努めている。	・学習指導要領やIB教科のガイドラインに基づく各教科での探究型学習を実践していく。 ・総合的な探究の時間では、IB教育のコア科目の要素を取り入れて、自ら問いを立てて批判的思考を養う。また、経験を積むことを通しながら教科横断の要としていく。 ・学年団及び教科担任との面談の機会を充実させながら、生徒たちのキャリア支援につなげる。 ・探究テーマをもとに、外部人材や図書活用を推進する。	・来年度の分掌目標・教科目標をスクールミッション、カリキュラムポリシーと整合性があるように作成し、目標に合わせたシラバス作成にとりかかっている。 ・1年生ではTOK展示やCAS活動を実施するなど、多くの生徒が国際バカロレア教育の手法を学ぶことができた。 ・2年生では総合的な探究の時間での研究論文を学年・教科を問わず、多くの教員に評価してもらった。評価コメントの内容に差はあるものの、多くの教員が関わったことに意義があった。 ・生徒たちは例年以上に多くのコンクールに参加した。	A	・日々の教育活動がスクールミッション達成に向けて、効果的になされているかを学校運営委員会を中心にチェック、アドバイスを行っていく。 ・1年生では国際バカロレア教育のコア科目を総合的な探究の時間に取り入れていくことを継続する。 ・2年生では、外部人材の活用によるコースでの探究活動を教科横断的に取り組み、キャリア支援につなげていく。 ・引き続き、生徒にコンクールへの参加に声かけをしていき、探究的な学びの深化を促す。
	学校行事・部活動の活性化	・コロナ禍の影響で学校全体の活動が縮小傾向であったが、今年度は生徒会行事の内容を対面とオンラインの良い面を生かしながら見直し、企画している段階である。 ・本校と本校生徒が目標とする「文武両道」の実現を目指し、生徒一人一人が所属する部活動での活動に打ち込む一方、各々の生徒が学校行事へ積極的に取り組み成果をあげている。 ・部活動に多くの制限を与えた新型コロナウイルス感染症であったが、逆境に負けずに多くの部が中国大会、全国大会に出場した。	・ガイドラインに沿った各部の活動を進めながら、部活動が生徒の成長の機会や自己表現の場として、年度末の生徒アンケートの結果で肯定的回答が90%を超えている。 ・生徒会行事の中にICTを取り入れ、教育的かつ効果的な成果を上げている。年度末の生徒アンケートにおいて、生徒会活動や学校行事に対する肯定的回答が90%を超えている。	・各行事において、ICT機器をどのように活用していくのかを検討し、生徒が中心となって活動する生徒会活動となるよう支援する。 ・教職員は感染予防対策を徹底しながら、生徒の主体的活動である部活動の充実に努める。 ・部活動の精選及び改廃規定にともない、新設する部、廃部になる部、存続する部に分かれるが、所属する生徒の活動を学校全体で支援していく。	・5月のコロナ感染症の5類移行後も感染者が出たが、生徒たちは落ち着いて生徒会行事や部活動に取り組むことが出来た。「学校評価アンケート(生徒)」では、部活動に対して90%(R4:91%)で肯定的な評価を得ている。 ・全国高校総体、全国高総文祭をはじめとして、運動部・文化部とも全国大会に出場を果たした。また、部として存在していないが、スポーツクライミング、将棋も中国大会、全国大会に出場した。 ・生徒が活動中の部活動に対しても部予算をはじめとした支援を続けている。	B	・コロナ禍以降、各種行事の在り方が大きく様変わりしてた。生徒にとって未体験な行事もあり、暫くは変革の機会と捉えて、より良い在り方を教職員生徒で知恵を出す機会を設ける。 ・今後も感染症対策は継続して行う。部室清掃、部室のゴミ出し、部室点検を実施しながら、部室の環境整備に努める。 ・令和6年度末をもって廃部となる部活動を含め、生徒の活動がより活発になるよう、生徒・顧問からの要望を聞き取りながら部活動を運営していく。

学校の諸活動の推進・発信と中高連携の強化	育友会・同窓会等との連携	・育友会においてはコロナ禍の中、役員を中心にしっかりとした連携を取り、工夫をしながら活動を行っている。しかし、総会においては3年連続で中止となり、書面審議での決議とした。その他の事業は少しずつコロナ禍前の状況に戻りつつある。 ・同窓会においては、総会を役員中心と限定の参加にしたが3年ぶりに開催することができた。各支部の取り組みも再開されつつある。	・育友会においては、保護者と教職員が一体となって、生徒を学習面、生活面から支援することができている。 ・同窓会においては、会員相互の親善を図り、各自の向上発展に資し、母校との連携が密になっている。	・役員との連携を十分にとりながら、コロナ禍前の状況に戻し、活動を活性化させる。総会も4年ぶりの集会形式を計画する。ただし、コロナの今後の動向を注視しながら、臨機応変な運営を行う。 ・国際バカロレア (IB) 教育などの新たな取組についての周知に努め、育友会及び同窓会員の理解を深める。	・育友会総会を4年ぶりに集会形式で開催することができた。259名の参加があり、保護者の関心の高さを感じた。進路研修会などの参加も多く、各事業に活発な様子が戻ってきた。 ・同窓会においては4年ぶりに参加制限なしでの総会を開催した。懇親会も行い、盛況な会となった。東京、東海、関西など、支部の総会も開催され、コロナ禍前の状況を取り戻している。 ・各事業において、保護者や同窓会で国際バカロレア教育の進捗状況が報告できている。	B	・育友会活動は、保護者が参加しやすいような体制を整え、教職員と一体となって生徒を支援する。 ・同窓会においては、総会の幹事学年運営を復活させ、規模を大きくしていく計画をしている。
	人権教育の充実	・生徒は概ね安心安全な学校生活を送っている。 ・人権教育LHRでは、人権教育LHR委員が教職員と話し合いを持ちながら運営をしているが、他の生徒の取り組みが受け身になりがちである。	・生徒一人一人に、自分も他人も尊重されるべき人間であるという意識と実践があり、自分らしさを発揮しつつ安心安全な学校生活を送っている。 ・人権教育LHRの企画・立案・運営を教職員の指導助言のもとで生徒が自主的に行うことで、活発な意見交換が行われ、人権状況の改善への意識と行動力が高まっている。 ・IB導入に向けて、人権教育LHR年間計画を整備する。	・教職員は、授業や学校行事、部活動などの学校の教育活動の全領域において人権教育に取り組む意識を持つ。 ・人権教育LHRがすべての生徒が自分のこととして人権について考えられる探究型のLHRとなるよう、企画から教職員が深く関わる。また、ICTの活用により効果的かつ深い学びとなるよう工夫する。 ・IB部と連携し、人権教育LHRの内容・方法等を検討する。	・教職員人権教育研修会を現地研修と校内研修の2回実施し、当事者に学ぶ意識と、生徒がより積極的に活動・学習できるLHRの作成方法を学ぶことができた。 ・各クラスの人権教育LHR委員がクラス担任等と話し合い、Googleドライブやアプリ、Chromebookを活用したスライド作成やポスターセッションを行うなど、各クラスの実情に合った人権教育LHRを協議・企画・運営することができた。 ・1年次でバカロレアTOKを活用した人権教育LHRを展開し、生徒主導でのより活発なLHRを実施できた。	B	・バカロレア教育の内容や手法を取り入れた次年度の人権教育LHRの年間計画の原案を年内に作成し、検討を重ねる。 ・準備期間が短いという意見が多かったので、人権教育LHRの日程から逆算してより準備に早く取り掛かれるような指導日程を計画する。 ・人権教育LHRへの保護者及び外部参観者が88人と昨年度よりも増加したが、さらなる参観者増のためにできることを検討する。
	学校に関する情報の発信と中高連携の強化	・学校・育友会ホームページや倉東だより等広報誌によって本校の教育活動についてリアルタイムな情報発信ができており、記事数もかなり多い。SNS(Instagram)のフォロワーも増え続けている。 ・中学での高校説明会、体験入学では本校の紹介を丁寧に伝えることができている。	・本校ホームページがより魅力的なものとなり、情報発信力が向上している。SNSにおいてもリアルタイムな情報発信ができています。 ・HP閲覧数、SNSフォロワー数がさらに増える。 ・中学生に本校の特色や魅力が伝わり、志望する生徒が増える。	・本校の教育活動に係るリアルタイムな情報発信に努める。 ・育友会広報委員会と連携し、保護者の本校教育活動への一層の理解と支援を促進する。 ・中学生体験入学や高校説明会の内容を充実させ、本校の取組を中学生に分かりやすく広報する。特にIB教育開始に向けた新たな取組等についての周知を図る。	・ホームページの記事発信(トップニュース)が多く、保護者、学校関係者へ好評である。SNSのフォロワーも増え続けており、1800人を超えた。 ・中学生体験入学は、暑さ対策を考えて教室での開催とした。チューターによる学校案内と座談会の時間を延ばしたところ、中学生から大変に好評であった。	A	・情報発信がより重要であるという認識をもって今後も発信に努めていく。 ・中学2年生対象説明会で本校の魅力をさらに伝えていく。アドミッション・ポリシー等の広報にも努める。

【定時制課程】

年度当初					最終評価結果(3)月		
評価項目	具体的項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度に向けての改善方策
定時制教育のさらなる充実	全ての生徒への安心安全で居心地のよい環境の提供	・授業規律が守られるとともに、生徒の学習到達度に合わせた学習内容となるよう工夫することで、授業への集中を促している。 ・生徒会執行部が中心となって運営される各種行事が、学校生活を継続するための生徒の励みになっている。 ・日頃の生徒への声かけや個別面談・家庭訪問・保護者懇談会などで得た情報を教職員間で日々共有することにより、温度差のない迅速で適切な指導につなげている。特性をもつ生徒に対する指導に関しては、まだ工夫の余地がある。	・規律ある学習態度が維持され、生徒は学習の意義や目的を理解し、意欲的に学んでいる。 ・教職員が生徒のことをよく理解し、丁寧に適切な指導がなされることで信頼関係が構築されている。また、生徒全員が安心安全な環境のもとでルールやマナーを守り、他者を尊重するとともに、授業や学校行事を通して自己の成長を感じられる雰囲気 が保たれている。	・生徒が中心となって企画・運営する生徒会活動とし、生徒間の相互理解や連帯感のある集団となるよう努める。 ・学校から積極的に情報発信や情報提供を行うとともに、保護者が相談しやすい体制を整え、学校と家庭の信頼関係の構築に努める。 ・生徒個々が抱える問題の解決に必要な支援や指導法について、専門機関等の講師を招き、教職員研修を充実させ、個に応じた支援を行う。	・1学期は3年次生、2学期は2年次生が執行部の中心となって行事の企画・運営を行い、学年を超えた交友関係が構築され、安心して登校できる環境となり、登校意欲が高まる生徒が増えた。 ・毎日の打合せで生徒情報を共有することで、生徒理解を土台とした統一感のある生徒指導を行った。 ・SC、SSW、CA、特別支援教育支援員や外部機関と連携しながら、生徒の状況に寄り添う指導を行い、不登校や怠学傾向のある生徒の改善につなげることができた。 ・生徒面談や保護者との連絡を密にし、学校と家庭が一体となって生徒の困り感の解消に努めた。	B	・生徒会行事は、2年次生を中心とした新執行部体制で企画・運営しており、能動的な取組が見られる。協働的活動がさらに活発に行われるよう促したい。 ・打合せでの生徒情報を共有し、SC、SSW、CA、特別支援教育支援員の協力も得ながら、全教職員体制で統一感のある生徒指導を行う。 ・不登校傾向の生徒や特性のある生徒に対して適切な対応ができるよう、関係機関との連携を深めるとともに、研修会などで教職員による教育相談に関する学びを進める。
	生徒の人間的成长や進路目標達成のための教育活動のさらなる充実	・生徒は授業に真摯に取り組み、生徒会活動や学校行事を肯定的に捉え、進路実現を目指して学校生活と就労の両立に努めているが、学び直し途上の生徒も多い。 ・各種講演会を通してキャリア形成について考える機会を設けるとともに、就労や企業見学等により生徒の進路意識が高まるよう指導しているが、具体的な進路目標を立てる時期が遅い傾向にある。 ・生徒は率先して生徒会役員に立候補し、生徒会執行部員は各種行事の企画・運営に積極的に参加している。	・授業に対する生徒の理解度や満足度が高く、それが個々の生徒の学力の伸長につながり、一人ひとりの希望進路が実現されている。 ・生徒が自己と他者を大切にし、人間的に成長するために、学習活動に加え、生徒会活動や学校行事等に意欲的に取り組んでいる。 ・様々な教育活動を通して、生徒が社会で必要とされる力を身につけている。	・個に応じた学習内容を提供したり、ICTを活用したりすることで、生徒の理解を促し、満足度の高い授業を行う。 ・生徒が主体的かつ意欲的に取り組むことができる生徒会活動とすることで、生徒の自尊感情を育む。 ・校外研修の訪問先での交流や各種講演会を企画し、生徒自身が生き方なり方を考え、自己実現に向けて具体的な取組ができるよう工夫する。	・Chromebookを用いて分かりやすい授業を実践するとともに公開授業を通して活用法を研究し、学習意欲の喚起に繋げる取組を行った。 ・次年度導入予定のAI搭載型教材の講習会を開催するとともに教員間でも研修を行い、新年度より全学年で本格的に活用する準備を進めている。 ・生徒が県総体や県生連大会の会場準備及び競技への参加、生徒会行事の企画・運営に取り組むことで、自己肯定感やコミュニケーション能力の育成につながった。 ・希望者に職場見学・体験を実施し、職業観・勤労観の醸成を図ることでキャリア教育の充実 に努めた。	B	・Chromebook等のICTを活用した分かりやすい授業の実践や学校行事・生徒会活動等での活用法の研究を進め、生徒・教職員ともに情報機器やソフトウェアを積極的に活用していく。 ・各種行事や生徒会活動等で、生徒の能動的・協働的に活動する場面を増やすことで連帯感を高め、生徒自身が自己有用感やコミュニケーション能力の向上を感じられるよう工夫する。 ・資格取得の奨励や課外の実施に加え、アルバイトや職場見学・体験を呼びかけ、キャリア形成に向かう動機付けとなるよう努める。

【全日・定時制課程共通】

年度当初					最終評価結果(3)月		
評価項目	具体的項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度に向けての改善方策
生徒支援の充実と業務改善の取組	新型コロナウイルス感染症、環境の変化、ストレス等に対応した生徒への心身両面でのサポート	・新型コロナウイルスの5類への引き下げに伴って再開される活動や行事によって疲労感を抱えたり、マスクの着用が緩和され、感染を恐れながら登校する生徒が存在する。周囲の目を気にしてマスクを外せない生徒など、多様な不安を持つ生徒も見受けられる。 ・様々な課題を抱えて心身のバランスを崩し、登校ができない、登校しても教室に入れない生徒が増加傾向にある。	・生徒が抱えている困難や悩みについて、正確な把握ができている。 ・担任・学年団、教育相談、管理職、部活顧問等が個々の生徒の情報を共有し、組織的な支援体制が構築できている。 ・対象となる生徒を、カウンセラーや医療機関等につなぎ、外部リソースを活用した多面的な支援がなされている。	・生徒や保護者との面接、アンケート調査、ストレスチェックなどを通じて生徒の内面理解を行う。 ・教員間の連絡を密にし、必要に応じて支援会議を開くなどして、具体的な支援計画を策定し、実行と改善を行う。 ・医療機関や福祉機関、行政機関と連携をとり、外部の支援が必要な生徒と外部機関との仲介を行う。	・新型コロナウイルス感染症が5類に移行後、集団生活や行事等に不適応を起こしていた生徒は、面談・カウンセリングを通じて概ね落ち着きを取り戻してきている。 ・校内支援会議の開催や、外部機関との連携を定期的かつ臨機応変に行い、方針を共有することで支援体制の維持、向上が図れている。 ・生徒理解のために実施しているQUIは、実施後すぐに教員が重要事項を確認するとともに、結果検討会を行うなど結果を活用できている。	B	・今後も校内支援会議の実施、外部機関との適切な連携を取りながら生徒支援を行う。 ・アンケート実施後、早期に結果分析の機会を設定し、多様化する生徒の悩みの理解、及びより迅速な支援へつなげていく。 ・支援に必要な情報が校内全体で確実に、より早く共有されるよう、引き続き情報共有の方法を模索していく。
	・業務内容の見直し ・長時間勤務者の解消	・令和4年度は、時間外業務を年360時間以上行った教職員は令和3年度より減少したが、依然として多い状況にある。 ・部活動での時間外業務が多い状況にあるが、一方で部の数の削減については一定の道筋がついている。 ・行事や業務の削減について協議が進行している。 ・定時制では、学校行事や校務分掌のバランスが取れており、時間外業務は少ない。	・教職員の月当たりの時間外業務が月平均30時間以内となっている。 ・休養日、活動時間を設定した部活動の活動方針が全部活動で徹底できている。 ・業務内容の精選について、各分掌及び学年で着手できている。	・時間外業務について、教職員が年間を通しての目標を意識する。また、部活動については、計画と実績報告との間に差異のないようにする。 ・校内業務のICT化(自動採点システムを含む)を一層推進するとともに、時期に応じて業務内容の方向性について検討していく。 ・定時制については、行事と校内業務とのバランスをとっていく。	・1月末時点では、一人当たりの時間外業務は月平均30時間以内となる見通しにある。平均時間は18.3時間で、昨年度よりも0.4時間増となり、すでに合計が360時間を超える教職員があることから、全員が30時間以下とはならない。 ・時間外の多い9月の業務カイゼンの一定の目途がついた。また、ICTの活用による業務の効率化も進んでいる。 ・定時制では、学校行事や校務分掌のバランスが取れており、時間外業務は少ない。	B	・新型コロナの5類移行に伴い、部活動の時間外業務が増える傾向にある。計画段階での確認と実績報告での超過に関する指導を徹底し、教職員の自覚を促したい。 ・スクールポリシーから逆算した業務カイゼンの視点を取り入れ、削減できる業務を検討する。 ・AI採点システム使用やGoogle Formの利用を一層推進し、時間外業務削減につなげる。